

論文の和文要旨

論文題目	マシャード・ジ・アシズの文学 ——『プラス・クーバスの死後の回想』に表われるブラジルの文化的特質——
氏名	武田千香

提出論文の構成

序章

第1章 〈X〉と〈非・X〉の織りなす物語世界——悪徳も美德の肥やし——

第2章 プラス・クーバスによる人生レビュー——ナラティヴに関する試論として——

第3章 パフォーマンスによる「制度」への問い——劇中劇風の回想録——

第4章 「非・小説」と「非・教育」の実践

——プラス・クーバスによる読書のレッスン——

第5章 物語に託された歴史——「執念」の茶番——

第6章 文体が映し出すブラジルの人・社会・文化——千鳥足の弁証法——

終章 ブラジルのリズム

1. 本論文の概要

本論文が扱う『プラス・クーバスの死後の回想』は、ブラジルの文学を代表する作家マシャード・ジ・アシズの最高傑作のひとつとされ、ブラジルの文学史においても評価が高く、マシャードの文学のみならず、ブラジルの文学全体から見てもきわめて重要な記念碑的な作品である。この魅力は何と云っても、彼と時代をともにした人間と社会をむしばむ愚かしいまでに醜悪な本性を抉り出すその手さばきであるが、その際に彼が使った革新的な文学的手法ゆえに、この小説は、出版から130年を経た今なお読者の目に斬新に映る。何よりもその特異性を示すのは、『プラス・クーバスの死後の回想』が、死者の語り手がつづった回想記として設定されている点で、このことをはじめとして、この作品はきわめて

奇抜な形式と内容を備え、読後に残される曖昧かつ不可解な箇所はおびただしい。このために、今もなお本国のブラジルにおいて重要な研究対象となっている。

本論文がめざすところは2点ある。まずは、このような難解な構造を備えた『プラス・クーバスの死後の回想』を読み解くことである。物語世界の構造や視覚的なテキストの多用、読者を挑発する語り手の攻撃的な態度等を、テキストの細部に隠されたヒントを拾いながら、その作品世界を分析することを試みた。第1章から第5章までがこれに相当する。もうひとつの挑戦は、『プラス・クーバスの死後の回想』を通して、マシャードやブラジルの文学のみならず、ブラジルという西洋にして非・西洋でもある風土に生きる人々と社会、さらにはその文化的な特質について考察することである。文学には、自然や文化的事象ばかりを絵画的に描きこむのではなく、「民衆の精神に非常に適した文体」こそ織り込まれるべきだと主張したマシャードが書いただけあって、第1章から第5章までの分析を通して浮かび上がってきた『プラス・クーバスの死後の回想』の物語世界の根底に横たわる構造は、単にこの一作品の物語世界を理解するための糸口であるばかりではなく、多面的なブラジル世界の人・社会・文化にまで敷衍できるものである。第6章と終章では、これについて論じた。

2. 各章の概略

『プラス・クーバスの死後の回想』は、死んでから作家となった主人公プラス・クーバス、語り手となって自らの生涯を振り返る回想記である。死者の語り手という奇想天外な設定をはじめとして、この小説には、読者に〈非・常識〉を突きつけることによって、〈常識〉を問うための構想や展開が多く仕掛けられている。第1章ではまず、この小説のそうした基本構造を探る。

二項対立を切り口として、人間や人間社会を捉える視点は、マシャードの文学の重要な特徴とされ、マシャードは、最初の長編小説である『復活』以来、その手法にこだわり続け、前期の小説には〈善〉と〈悪〉、〈美〉と〈醜〉などの対立概念がふんだんに盛り込まれている。『プラス・クーバスの死後の回想』でもそれは踏襲されているが、この小説がそれまでと大きく異なるのは、それらの対概念が、この小説の世界ではもはや対立せずに、完全に相対的なものとして捉えられていることである。たとえば海岸で拾得した5コントの大金をめぐるプラス・クーバスの一連の行動は、表向きでは〈善〉行や〈非・善〉行という対照的な表われ方をしても、実はそれらは彼のエゴという同じメダルの表と裏にすぎない。彼は自分の必要性と都合に合わせて、世間体を参考指標としながら、自らのエゴを調整する。このように、通常は自明とされている概念が(〈X〉と記す)、都合や必要性に応じて〈非・X〉と臨機応変に入れ替わる人の心や社会の実態を、「〈X〉⇔〈非・X〉」と記すならば、それこそが、『プラス・クーバスの死後の回想』という小説の物語世界の基本構造である。プラス・クーバスを通してマシャードが俎上に載せるのは、個々の人間の心の動きや行動ばかりではない。〈恋愛〉や〈結婚〉といった制度、キリスト教の教義や学問

など、西洋を中心に、世界がこれまで打ち立ててきたあらゆる体系が〈非・X〉の転覆を被る。

さて、『プラス・クーバスの死後の回想』は、出版された当時、「これは小説か？」と疑問が呈されたほどに型破りな「小説」であるが、「小説」らしくない特徴として挙げられるものには、独特のナラティブ、視覚的なテキストの活用、挑発的な語り手、煩いほどに登場する読者の存在、といったものがある。多くの先行研究においてこれらのテーマは、物語論、記号論、読者の受容理論などの観点から分析されているが、本論文では、これらの特徴を、それぞれ個別に、違った観点から論じるのではなく、同一の回想記の異なる側面として、これらすべての相関性を明らかにしながら、物語全体の構図を描くことに挑戦した。そこで注目したのが演劇性である。マシャードは、小説家になる前は、戯作、演劇評論、戯曲翻訳をおこなうなど演劇界での活躍経験がある。

第2章は、マシャードの同時代の劇作家アルトゥール・アゼヴェードの『いかさま師』を例にとり、レビューに見られる短い場、素早い場面展開、寓意を用いた人物設定、一人多役を演じる司会進行役の存在、メタ言語の使用などといった特徴と、『プラス・クーバスの死後の回想』のナラティブとの親和性を分析し、マシャードがこのナラティブを考案するにあたって、レビューをヒントにした可能性があることを指摘した。なかなか文学が民衆に届かないことを憂えたマシャードが、レビューという民衆演劇と文学性を合体させることで、民衆へのアプローチを図ったと考えられるのである。

『プラス・クーバスの死後の回想』と民衆演劇の親和性は、パフォーマンス性にも認められる。第3章では、この小説のパフォーマンス性に着目し、一般的にこの小説の「小説らしくない」特徴として挙げられる挑発的な語り手の存在や視覚的テキストの多用について考察した。頻繁に登場する読者は、民衆演劇の役者と観衆のあいだに生まれる、挑発や反発をベースとした活発なコミュニケーションを、この小説の中にも創出するための仕掛けであり、また視覚的テキストは、役者の身体的な存在を、紙媒体のテキスト上で、できるだけありのまま伝えようとしたマシャードの苦肉の策だと考えられる。挑発を通して規範や道徳の有効性を観客に問うことを特徴とするパフォーマンスは、〈X〉の絶対性を否定し、読者に〈非・X〉を気づかせるためには恰好の形態だったのであろう。マシャードは、「人生=芝居」というメタファーを使って、レビュー仕立てで自らの人生を語り、またそれ同時に、「人生=本」というメタファーを使って、それを文字媒体の本に仕立てたと考えられる。

第4章では、挑発的な語り手と作中の読者の関係に着目し、この小説が持つ読書教育的な側面に焦点を当てた。マシャードは、読者にただ筋を追わせ、笑って涙させるだけの当時の流行小説の在り方には批判的で、自らの頭で思索し判断する知的な活動としての読書を読者に求めていた。作中の読者に対する語り手の挑発は、マシャードが仕掛けた〈非・教育〉的な読書〈教育〉の表われであり、マシャードは、小説とパフォーマンス的な演劇との融合という、〈非・文学〉的で、〈非・小説〉的な作品の創作を通して、文学制度に対

しても挑戦を図ったと考えられる。

第5章では、詳細に記されているいくつかの年号や日付を手がかりに、『プラス・クーバスの死後の回想』が、ブラジルのみならず当時のヨーロッパに端を発したナショナリズムのもとで、世界中がそれぞれの「帝国」樹立をめざして浅ましい争奪戦を繰り広げた様相が寓意的に描かれていることを指摘した。〈絶対〉だと信じて、死に物狂いで追い求めた近代国家も、結局はまた〈非・絶対〉であったわけである。

このように、『プラス・クーバスの死後の回想』から浮かび上がってくるのは、道徳にしる、規範にしる、そして制度にしる、宗教にしる、思想にしる、常にヨーロッパ伝来の〈X〉を追いかけては、それに対する〈非・X〉を見出しながら切り抜けて行ったブラジルの姿である。マシャードが「民衆の精神に適した文体」として、このテキストの中に刻み込んだ基本の動き「〈X〉 ⇔ 〈非・X〉」が表象しているのは、まさにそのブラジルの在り方であろう

第6章では、マシャード自らが「千鳥足の（酔いどれのような）文体」とも呼んだこのスタイルが、マシャードのひと世代前のマヌエル・アントニオ・ジ・アルメイダの『ある在郷軍曹の半生』においてすでにみられ、またブラジルの社会においても見られる特徴的な行動様式「マランドラージェイン」に通じるものであることを明らかにした。

大変興味深いのは、以上のことをふまえて、現代のブラジルの文化や社会を見ると、そのブラジルの「民衆の精神に非常に適した文体」が、ブラジル人特有の社会遊泳術とされる「マランドラージェイン」や「ジェイチーニョ」のみならず、サッカー、サンバ、カーニバルなどの他の文化事象にも認められることである。この「〈X〉 ⇔ 〈非・X〉」という「千鳥足の弁証法」ともいうべき動きは、ブラジルの人・文化・社会を理解する重要な鍵なのではないか。本研究の結論として、その可能性を示唆したのが終章である。